

石川にもこんな「家」欲しいね！

—— 福井県国立北潟病院「ともしびの家」見学する ——

かねてより入所の会員のみなさんから希望のあった福井県の北潟病院の「父母の会」で作った「家」の見学がようやく11月28日に実現しました。当日は医王病院の会員が13名参加されました。

訪ねるきっかけは、守る会の会員から「私たちも年を重ねるにつれて子供たちを家へつれて帰っても世話ができにくくなってきた・・・できれば病院のそばに子供と一緒に宿泊できるような施設があったらいいね。」と言った希望によるものです。

当日は、福井県の守る会会長「富田氏」の案内で施設の建設の経過及び運営についてエピソードを交えて説明を受けました。

施設の建設のきっかけは、県外の入所者からの希望と、比較的高齢の保護者の希望によります。ところが、「ともしびの家」を建設に当たりいくつかの問題点が生じてきました。

その問題点は、次のとおり指摘された。

- 1 保護者に施設の建設の必要性を理解してもらうこと。
- 2 国立病院の敷地に施設を建築する場合には、病院関係者（特に病院長，事務局長）に建設することの意義に理解を求め建設のについての許可を得る必要がある。
- 3 建物の建築計画（建築場所・設計・施工）を十分検討すること。
- 4 建築資金の調達計画を立てること。
- 5 施設の建築後の運営方針（利用の方法）を定めること。

問題解決に当たり北潟病院の場合

1 について

最初は2病棟（各40名）の保護者の意見が分かれた。比較的高齢な保護者はその必要性を理解してもらえたが、若い保護者には、実感がないのかその理由は不明であるが、なかなか理解してもらえなかったが、結果的には、2～3名を残し理解を得た。

2 について

病院長，事務局長の理解が得られず苦労はしたが、幸い3年目にたまたまこれらのことに理解を示していただいた。事務局長に巡り合い、ことの解決をみました。



4について

そこで、具体的な父母の負担計画は次のとおりです。

1 1人20万円 {80×20=1600万円} (但し保護者のいない者は除く)

但し、受給することになったときに10万円を拠出

5について

- 現実には備品類は寄付してもらった。

これからは、いくつかのハードルを乗り越えなければならないが、医王の「父母の会」の理解を得ることが大事であると感じました。

また、このような施設ができれば「父母の会」の事業遂行にも、さらに「守る会」の在宅支援の一策としてのレスパイト事業等に活用できることを改めて確信しました。

[illegible]

會員數現況

在宅・入所を含む

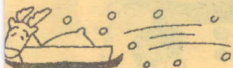
賛助会員 25名

田中隆司 岡部 昭

横井 透 小淵春美

小淵春美

裏へ続く



第3回巡回療育相談を終えて



前号でもお知らせしたように10月7日(能登地区)10月8日(加賀地区)に第3回の巡回療育相談が行なわれました。

能登地区

能登中部保健所を会場にして「笑みの会」の行事と連動して実施しました。

5人の親子の方が相談を受けられ、日頃の悩みや疑問点などを熱心に質問されました。昨年相談された蛸島のS君親子も来られて能登地区での就学問題についての相談をされました。障害児の療育の場についても教育の場についても能登という地域の問題の大きさが浮き彫りにされました。

加賀地区

小松市立和光学園を会場にして実施しました。当日は小松療育園の西川コーディネーター、石川病院の滝沢医師もスタッフに加わって頂きました。相談の始まる前に小淵園長の案内で園内の施設や療育の様子を見学させていただきました。

相談を受けた6人の親子の内4人は昨年からの継続の方で、和光学園の療育とお母さん達の努力の中で大きく成長されており、スタッフ一同感激しました。

相談の内容は食事やあそびなど日頃の関わり方から将来の就学についてまで様々でしたが、就学については今年度から一人でも地域の学校に障害児学級が設置できるようになったことで少しは改善されたようです。

巡回療育相談を継続して

越坂由紀子

石川守る会の巡回療育相談も回を重ねる中で、様々な地域格差に直面しています。在宅で重い障害のある方を抱え生活していく上での様々な問題が浮き彫りになってきています。相談の中で解決できる問題もありますが、解決できなくてもスタッフの方がいっしょに考え、相談者に心を寄せていく……そんな場面が増えてきたように思います。

巡回療育相談の第1回目の相談者であった山崎さんは児童相談所や保健婦さんの指導のもと「笑みの会」を設立され、能登に障害児のための施設をとがんばっておられ、たくましいお母さんになりました。今回お会いして七尾市長宛に心身障害児通園施設建設の要望書を提出されたこととお聞きし、「石川守る会」としても支援させて頂くことをお約束いたしました。

また、和光学園では細やかな配慮のもとに子ども達に愛情を注いで療育されておられる様子を見せていただき、これからは施設と医師、看護婦、訓練士との連携のさらなる充実が望まれていると強く感じました。

来年は、是非、石川県の担当者の方々にも参加していただきたいと思ったものです。スタッフとしてご協力いただいたみなさんには心からお礼申し上げます。



有共同の悩み 休息に介護

重症障害者受け入れ事業好評

『守る会』が月1回

『楽しい』と参加の親も

寝たきりや意識がない重症障害者を預かる支援事業「ハートボッポ」が好評だ。月一回の受け入れを利用して、親が休養をとったり、子どもと外を散歩し、充実した一日を送っている。十九日には、金沢市の県社会福祉会館で五回目の受け入れがあり、金沢市や松任市、根上町など九人が参加、クリスマス会を満喫した。



サンタからプレゼントをもらって笑顔をみせる重症心身障害の子どもたち。県社会福祉会館で

小さなクリスマスツリーが飾られた室内には、歌を歌ったり、ハンドベルを響かせるボランティアらに交じってじっと聞き入る障害児者の姿が見られた。周囲には、栄養補給用の点滴もある。

参加したのは四歳から四十二歳までの重症心身障害児者。十三人が介助に加わっている。介助者のひざの上にくったりと身を任せたままだが、ハンドベルの音色に上体を起こし、笑顔も見せた。クリスマスケーキづくりも初めての体験。手助けを受けて、ゆっくりと手を動かし、生クリームを塗っていく作業に夢中になる少女のような二十代の女性もいた。

この事業を主催するのは、全国重症心身障害児(者)を守る会員支部。介護する親が安心して休養できる環境を今年八月から開催している。障害者も家族も家にこもりきりになることが多い。障害児の親の団体はあるが、重症者に特有のこれらの悩みを共有する場はなかった。

立ち上がったのは、自らも重度障害児を育てていた同支部の越坂由紀子事務局長(津幡町庄)。支部世話人や医師ら数人で障害児のものと行き、悩みをきく巡回療育相談を続けてきたが、外出できないお母さんの悩みを痛感。知り合いの養護学校教諭や医師、看護婦に参加してもらい支援事業を始めた。

「かせをひいても病院に行けない。子どもの症状の悪化などが重なり、心も体もつぶれかかったこともある。自殺するわけにもいかなかった」と話すのは、参加して三回目になる皆川智恵さん(内灘町)。骨休めはそこで「自分も楽しくて」と脳性まひで寝たきりの長男(七)と一緒に参加している。毎月のこの事業の前には長男は興奮して眠れないという。

越坂事務局長は「こもりきりになっている重症障害児の家族はもっといるはず。自立のためにも離れることは必要」と参加を呼び掛けている。参加費は三百円。問い合わせは会員の西脇瑞枝さん。電話090(43000)2011。